

## 「子ども」と「ジレンマ」について考える

藤井 聡

心理学では「得」をしようと考えれば考えるほど「損」をしてしまうようになり、逆に「損」したって構わないと開き直れば「得」をするようになる、というような現象があることが知られている。これは例えば、人に好かれようとする人ほど嫌われてしまう一方で、「別に人に嫌われたって構やしない」という余裕がある人ほど人気者になると言うようなことと同じだ。つまり、「損」と「得」の間には、一筋縄では行かない、矛盾だらけの「ジレンマ」があるのだ。

もっと言えば「善」と「悪」との関にも一筋縄では行かないジレンマがある。例えば、誰が見たって「善い行為」としか思えない様な行為の裏に「こいつを利用してやろう」というような「わるい」と動機が潜んでいることもある。逆に、一見「わるい」と言われかねない様な行為の裏側に、「世のため人のため」というような「善い」気持ちが含まれていることも少なくない。

そういえば、筆者の子ども時代を振り返って考えてみるに、昔の子ども達は損や得、善や悪というものが、単純に割り切れるもんじゃないということ、知らず知らずに学んでいったように思う。

例えば、花咲じいさんや傘地蔵などは、損と得の間のジレンマを教えてくれている分かなりやすいお話だった。善と悪についていえば、「悪」と戦う「正義の味方」のタイガーマスクは、元々は「極悪」レスラーだった。そして最終回では一番「悪い」奴をやっつけるために長らく封印していた超反則技を、自分を慕っている子ども達の目の前でやっつけてしまう、というポケモンやドラゴンボールではあり得ない無茶苦茶な深みある話だった。もっと昔を振り返れば、子ども達が触れる神話の世界では天照大神はすねて洞窟に入るし、洞窟の前で何だか楽しい宴会があればこっそりのぞき見したりしていた。西洋でだって、全知全能の神ゼウスは相当な好色だったし、なんと言っても悪の権化のハデスの兄弟だった。さらに言うなら、「わるい人々」が主役の任侠映画やゴッドファーザーが大人達には大人気で、子ども達も大人の横でそんな映画をいつも見ていた。

おそらくは昔の子ども達こんな風にして「悪人のよい行い」や「善人のわるい行い」に触れる事を通じて、この世が不如意に満ちたものであるという現実を理解していったのだろう。そしてそれと同時に、「本当に悪い事」や「本当に善い事」がどんな事なのかを学んでいったのだろうと思う。

多分今でだってそうやっているんなら“ジレンマ”を飲み込むチカラを子ども達が身につけていけば、少々困ったことがあっても何とか出来るような子どもになるのだろうと思う。だから、「ポケモンやドラゴンボールを見ちゃダメ！」とまでは言えないとしても、この世のいろんなジレンマや不如意を上手に提示しつづけていくような工夫が、今の大人達には大切なだろうと思う。